

らず小なりとぞ、又馬に恐る、狼は馬をころし、其狼は熊に制せらる、物性いかなればかくあるにか、

〔兔園小説三集〕むじな、たぬき、

海棠庵記

彼○羽州由 與兵衛いふ熊につきのわとて咽喉の下に、白き毛あり、形月の輪の如くなれば、しがいふとなん、さるにそのつきの輪に不同あり、圓なるあり、半輪あり、織月のごときあり、またつきのわのなきあり、こはその熊の生る、日十五日なれば輪圓なり、晦日なれば輪なし、餘は月の盈缺によりて、准知すべしといふ、一奇事なり、

〔夫木和歌抄熊二十七〕六帖題

衣笠内大臣

おく山に住あらくまの月のわに夜めこそいとくもらざるらめ

〔庭訓往來〕熊掌、狸澤渡、○中 氷魚等或買貳、或乞索令進之候、

〔庭訓往來諸抄大成〕熊掌、狸澤渡、猿木取、いづれも皆手足の事也、

〔本草和名十五〕熊脂。一名熊白陶景注云、是熊高、猶多力、一名猯音鄙、宜反、關西名之、和名、久末乃阿布良、

〔倭名類聚抄十八〕熊白。本草云、熊脂一名熊白、和名久末、熊背上膏也、

〔箋注倭名類聚抄七〕原書獸部上品熊脂條陶注云、此脂即是熊白、是背上膏、則知此所引陶注也、

本草和名亦云熊脂一名熊白、陶景注云、是背上膏也、此有一名字、似從本草和名引之、

〔類聚名義抄四〕熊脂クマノアブラ 熊白訓同

〔延喜式二十〕祥瑞

赤熊略中 右祥瑞略中

青熊略中 右中瑞

瑞熊